

## 佐賀大学2009年度版日本語カリキュラムの実施と振り返り

中山亜紀子<sup>1,2</sup>、古賀弘毅<sup>1</sup>、フォード丹羽順子<sup>1</sup>、布尾勝一郎<sup>1</sup>、吉川達<sup>1</sup>

### A History of Japanese Education of Saga University after 2009 Curriculum Reform

NAKAYAMA Akiko, KOGA Hiroki, FORD-NIWA Junko,  
NUNOO Katsuichiro, YOSHIKAWA Toru

#### 要 旨

本学の日本語教育は2009年度後期に大きな改革を行った。本稿では、それ以降現在までの6年半の軌跡を振り返ることによって、現在、筆者らが直面している課題を洗いだし、次のカリキュラム改革に役立てようとするものである。分析の結果、本学で学ぶ留学生数は減少しているが、日本語コースの受講者数は減っていないことが明らかになった。授業内容の面では、自律的学習やアクティブ・ラーニングなどの手法を取り入れたクラス運営が行われていた。課題としては、英語で研究を行う大学院生、研究生の日本語学習のニーズをとらえることが難しいこと、上級レベルでは日本語の学習のみを目標とする日本語科目を提供するだけでは、学生のニーズに応えることができないことなどが挙げられた。最後に、アカデミック・ジャパニーズや大学における日本語教育の観点から考察を加える。

【キーワード】カリキュラム改革、アカデミック・ジャパニーズ、大学における日本語教育

#### はじめに

本稿では、2009年度後半に再編された2009年版カリキュラムを振り返る。それによって、今までの6年半の期間で、佐賀大学の日本語カリキュラムがどのような課題を抱え、それを改善していったのか、その改革の軌跡を明らかにし、今後、日本語カリキュラムが進むべき道筋を考える一助とする。

#### 1. 2009年度後期の改革－属性別クラスの段階的終了

2009年度後期以前の佐賀大学の日本語カリキュラムは、留学生の属性によって4つのコースが走っていた。研究留学生のための予備教育（日本語研修コース、初級および中級の

---

<sup>1</sup> 全学教育機構所属

<sup>2</sup> 責任著者

2 レベル)、短期留学プログラム (SPACE) の学生<sup>3</sup>のためのコース (初級前半、初級後半、および中級の 3 レベル)、それ以外の属性の学生<sup>4</sup>のための総合コース (初級 1、初級 2、中級、中上級、上級の 5 レベル)、さらに、学部留学生のための教養教育の日本語 (中級、上級、超級の 3 クラス) である。

学生の身分別のクラスは、学生のニーズが把握しやすい、進度や課題等に学生の現状を反映しやすい等の利点が多く見られた。しかしながら、日本語研修コースを履修する学生数が減少し、クラスとしての活動を維持するのが難しくなる一方で、総合コースの受講者が増加の一途をたどる、母校での単位認定を望む特別聴講学生が、学部留学生のための教養教育の授業に大挙して押しかけるなどの問題が生じていた。

これらの問題を解決するために、日本語研修コース、SPACE、総合コースを統合して作られたのが、2009年度版カリキュラムの「日本語コース」である。属性の異なる学生を一つのクラスにまとめるために、「アカデミック・ジャパニーズ」をカリキュラムの柱とすることになった。ここでいうアカデミック・ジャパニーズとは、学術的に使われる日本語という意味のみではなく、大学というアカデミックな世界で使用される日本語であり、大学内での事務手続きや同級生との会話で必要とされるキャンパス・ジャパニーズと、学術的に用いられる狭義のアカデミック・ジャパニーズを合わせたものである。

なお、教養教育の日本語は、中級以上の学部留学生に必要な読み書き、および発表を中心にカリキュラムを組む総合的クラスが維持されることとなった。

## 2. 2009年度後期から、2015年度まで

以下では、2009年度後期からの「日本語コース」について述べる。

### 2-1 開講日本語科目と受講者数推移

日本語コースでは、初級前半レベル (レベルⅠ)、初級後半レベル (レベルⅡ)、初中級レベル (レベルⅢ)、中級レベル (レベルⅣ)、中上級レベル (レベルⅤ)、上級レベル (レベルⅥ) の 6 レベルを設定した。主となる受講者の身分やレベル毎に必要な内容を勘案し、レベルによって異なる授業科目を開講した。2009年度後期に開講された授業科目を基本として踏襲しているが、次節で述べるように、必要に応じて開講科目の見直しを行った。

図 1 に2015年度の日本語コースの全体図を示す。総合 (2009年当初は本編) コースとは、1 週間に 6 コマ<sup>5</sup> (初中級ではのちに 5 コマ) を使い、文法、会話、読解、作文などを総合

<sup>3</sup> 本プログラムの学生は、本学では協定校からの特別聴講学生、という身分をもつ。

<sup>4</sup> 受講者は、学部生、大学院生、研究生、特別聴講生、科目等履修生、教員・研究員、留学生の家族であった。

<sup>5</sup> 1 コマは、1.5時間である。

的に学習する授業である。技能別クラスは、文法、会話、読解、作文、漢字・語彙の各技能別に授業を行うもので、授業時間は週1コマである。日本語授業に時間を割ける学生にはできる限り総合コースを受講するよう勧めているが、大学院生など日本語学習にあまり時間をさけない学生も日本語学習ができるように技能別クラスを設けている。

総合コースは専任教員がコーディネートを行い、各技能別クラスの教科書、教材は担当教員が決定していた。新規受講者のレベル判定は、日本語コース全体のプレースメントテストの結果によってなされていたが、漢字・語彙科目、会話科目に関しては、受講者のレベルに合わせ、レベルの調整を行い、学生の日本語能力にあったレベルで受講できるようにした。

本学の受け入れ留学生数は、2010年5月に302名であったのが、2015年5月には209名となり年々その数が減少している（表1参考）が、日本語コースの受講者数は、ほぼ横ばいである（表2参考）。

図1. 日本語コース全体図（開講科目は2015年度のもの）

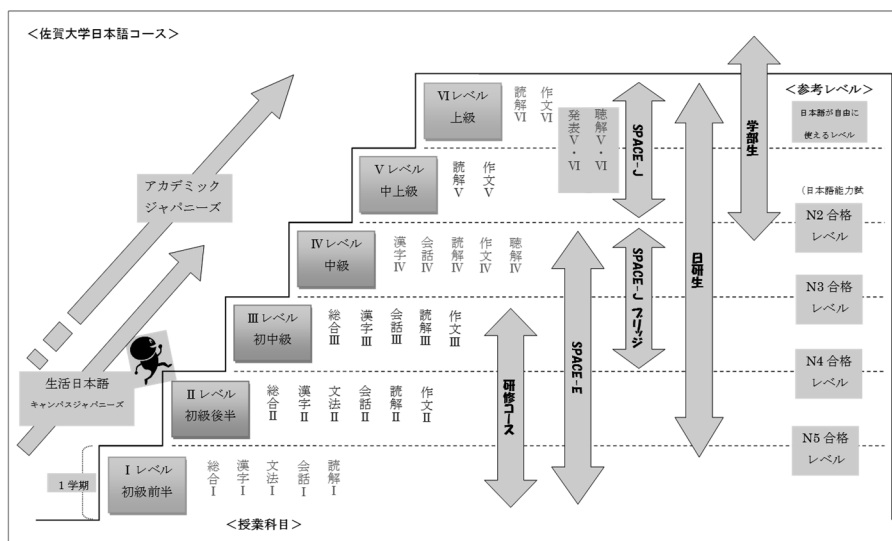


表1. 佐賀大学の留学生数の推移

年度	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
学部留学生	52	51	54	74	75	71	61
大学院留学生 (うち特別コース)	156 (41)	155 (48)	146 (43)	121 (35)	112 (27)	89 (17)	83 (17)
研究生／特別聴講生	87	77	75	62	60	65	61
連大	11	19	22	22	14	7	4
留学生総数	306	302	297	279	261	232	209

表2. 留学身分別日本語コース異なり受講者数

		09後	10前	10後	11前	11後	12前	12後	13前	13後	14前	14後	15前
特別聴講生	SPACE-E		46	29	19	17	16	25	25	30	28	20	20
	SPACE-J*1				16	10	21	18	22	26	27	22	25
	日研究生		0	0	0	0	0	0	1	3	3	2	2
大学院生			24	33	21	31	29	16	20	16	12	15	22
研究生			12	21	14	18	13	11	8	9	3	22	8
学部生*2			19	1	1	5	6	1	5	1	3	0	3
特別研究学生			0	0	0	0	0	0	2	2	0	0	1
科目等履修生			1	1	0	0	0	0	0	3	0	0	0
教員・研究員			1	3	0	3	5	1	1	1	1	0	1
その他			0	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0
計		不明	103	88	71	85	90	72	84	92	77	82	82

\*1 旧特別聴講学生一般含む

\*2 ツイニングプログラム含む

## 2-2 単位認定

2009年度のカリキュラム改革のもう一つの大きな柱は、留学生センター提供の授業ではあっても、佐賀大学の全学的な基準や授業評価をとり入れたことであった。これは一気に進められたわけではないが、すべてのクラスを1学期15週とし、授業担当者がシラバスを執筆し、それらを受講案内としてホームページと紙媒体で公開した。さらに、授業評価アンケートを実施した。その結果、母校で単位として認定されやすくなったため、教養教育の日本語に流れていた特別聴講学生が、日本語コースの授業を受講するようになった。

本学では、2012年3月をもって留学生センターが廃止された。それに伴い、それまで留学生センターが提供していた日本語コースの日本語科目は、2012年度は「教養教育機構」、2013年度からは「全学教育機構」で提供されることになった。実施機関の変更による日本語コースの授業内容に大きな変更はなかったが、機構へ移行する際に、日本語コースの日本語授業科目を佐賀大学の正規の単位として認定することになった。それにより、特別聴講学生、日研究生については、本学で取得した日本語科目の単位を自国の所属大学で認定しやすくなった。一方、単位認定を必要としない研究生、大学院生、学部生が日本語コースの日本語科目を受講する際は、「特例受講」として扱うこととなった。

## 2-3 各コース、プログラムの変遷

上述のように、日本語コースが開講されたのであるが、属性別のクラスを廃止することによって、様々な属性の学生同士に交流が生まれたこと、またある程度の受講者数を確保

できるようになったことは良い点であった。以下、各コースやプログラムにどのような変化をもたらしたかを述べていく。

### 2-3-1 日本語研修コース

国費と私費の研究留学生のための日本語研修コースでは、2009年カリキュラム改革以前は初級17コマ（週）、中級13コマ（週）の受講が求められていたが、週6コマの総合クラスとすべての技能別のクラスを受講することになった。指導教員が受講を認め、初級前半では11コマ、初級後半では10コマ、初中級9コマを受講した研究生を「日本語研修コース」の学生として認定することになった。

日本語コース開始当初は、研究生や大学院生向けに、初級前半レベル、初級後半レベル、初中級レベルで、1週間に6コマかけて総合的に日本語学習を行う「本編クラス（後に「総合」と改称）」を開講していた。しかし、国費の研究生数が減少したことにより、極端に受講生が少なくなるクラスが生じた。また、英語で行われる特別コースの学生が研究生の大半を占めるようになったことにより、学期当初は「研修コース」に登録し、所定の科目を受講することになっていても、専門科目との兼ね合いで、徐々にクラスに来なくなる学生も多くなってきた。これらの問題を受けて、2012年度前期より研究生や大学院生向けと後述するSPACEクラスとを統合した。

これにより、研修コースの学生が、日本語コース全体の中に埋もれてしまったことは否めない。英語で研究を行う大学院生／研究生のニーズにどのように対応していくべきか、また日本語で研究することが必要な研究生の日本語学習をどう保障するのかは、今後の課題となっている。

### 2-3-2 協定校からの特別聴講学生（SPACE）

特別聴講学生のためのプログラムとして、2009年度時点では、英語で行われるSPACEのみが提供されていた。SPACEの学生には、日本語学習歴がない者、あるいは初級終了程度の学生が多かったため、SPACEの学生用として、初級前半レベル、初級後半レベル、初中級レベルでは、1週間6コマの総合的な「本編クラス（後に「総合」と改称）」を開講した。しかし、安定的に2コースを走らせることが難しくなったため、研究生向けのコースと統合したことは、前述のとおりである。

また、2013年度後期より、日本語の履修を必須とすることなく、各自の希望する佐賀大学開講の授業を履修できることを特徴とした「SPACE-J」プログラムが開始され、それに伴ってそれまでの「SPACE」プログラムは、「SPACE-E」プログラムと改称された。また、特別聴講学生一般は、SPACE-J開始に伴い新規留学生の募集を終了した。

SPACE-Jプログラムでは、日本語能力試験N2合格を応募の条件としているが、N2取得者であっても、実際の運用能力が伴っていなかったり、大学での授業についていけるレベル

に達していない場合が散見された。そこで、本学のプレースメントテストの結果、日本語能力が大学での授業の受講に不十分と判定された学生に「ブリッジプログラム」に参加することを求めることになった。ブリッジプログラムの学生は、専門授業よりも日本語コースの授業を優先的に履修することになり、各学生の日本語能力に合わせて、初中級／中級で開講されている科目をすべて履修することを義務付けた。

### 2-3-3 日本語・日本文化研修留学生（日研生）

本学の日研生コースは、2009年度後期から実際に学生の受け入れを始めた。2009年度当時は、学部留学生と同様の日本語／留学生教育を受けることを求め、教養教育の日本語Ⅰ、日本語Ⅱ、学部留学生のための日本事情を必須としていた。しかし、2013年度からは、日研生の日本語ニーズに合わせて、日本語教育は日本語コースから各自のレベルに合わせて履修できるようになった。

### 2-3-4 学部留学生

学部留学生対象の日本語教育は、従来通り教養教育の外国語科目としての日本語科目（日本語Ⅰ、日本語Ⅱ）が、英語などの外国語との読み替え可能な科目として設定されていた。日本語コースが全学教育機構で開講されるようになってから、日本語コースの科目でも単位が取得できるようになったが、外国語科目としての読み替えができないことから、受講者数は限定的だった。

## 2-4 日本語のレベル判定について

日本語コース新規受講者は、日本語未習者を除き、全員が学期開始前に共通の日本語プレースメントテストを受験することになっており、その結果によりレベル判定が行われる。日本語プレースメントテストは、主に日本語能力試験の過去問題の識別力と困難度を参照し、適当な項目を引用して構成されている。2015年度現在のテスト分野は、聴解、文法、読解、作文である。

プレースメントテストは、大きく2度改訂されている。2009年度後期から実施されていたものは、2011年度前期まで使用され、2011年度後期に改訂された。このとき、作文を除く客観式テストの解答方法にマークシートが導入され、採点処理の時間の短縮と人員の削減がなされた。同時に漢字分野が削除され、漢字の能力は、授業開始後に漢字授業内で確認されることになった。

2回目の改訂は2013年度後期終了後に行われた。それまでのプレースメントテストでは、初中級レベル、中級レベル、中上級レベルの3つのレベルの判定が難しいこと、学期終了後飛び級などを希望する学生がいても2度プレースメントテストを実施することができないことなどの問題が挙がっていた。それらを解決するために、それまで使用されていた問

題を再度精査し再構成するとともに、同形式の別版のテストを作成した。A版、B版二つのプレースメントテストは予備テストにおいて等質性が確認され、飛び級などの再受験に対応できるようになった。

### 3 各レベルの変遷

#### 3-1 レベル I (初級前半)

日本語初級前半レベルでは、2011年後期まで、総合コースを、前期に1コース、後期に2コース提供した。加えて、技能別科目として、非漢字圏学生用漢字、漢字圏学生用漢字、会話、発音・リスニング、生活日本語の5科目が提供された。後期から佐賀大学での留学を始める留学生が多いため、専任教員は、後期に2つの総合を運営することになり、負担が重かった。受講者数の推移は表3のとおりである。2012年以降、人的／経済的リソースをより有効に活用するために、総合コースは、前・後期1コースずつにしたことにより、受講者数は十分確保されるようになった。

さらに、2013年度前期から、総合初級前半は、各学期とも、技能別の科目を4科目に削減した。

初級前半の目標は、1) 日常生活における出来事や状況について日本語で聞いて読んで理解したり、日本人にわかるように、話せ、書けるようになること、2) 現在時制と過去時制を使え、理由、条件などを述べられるようになることであった。初級前半と初級後半では、*Situational Functional Japanese* (以下、SFJ) を教科書として採用し、初級前半は、SFJの第1課から第12課までを扱い、同目標達成を目指した。

SPACE-Eの学生は、日本語と日本事情研修、および自分の学部の科目に集中できるため、かなりの時間を日本語の予習と復習にかけられ、かつ、総合コース以外の科目も受講し、日本語運用力をつけることができた。SFJは、予習・復習の習慣が身についた学生には適したもので、半年でかなりの日本語運用力を身につけられた。

しかし、日本語研修コースの学生や大学院生は、学期の最初はやる気があっても、学期が進むにつれて、専攻の実験などで忙しくなり、予習と復習が必要なSFJの授業にはついていくことができない学生が多かった。この点を考慮に入れて、科目登録の際、総合コースの6コマに出席できそうにない学生には、受講を控えてもらうように指導した。しかしこのように履修指導をしても、同じ問題は残り続けた。

予習／復習のためにかかなりの時間を割かなければならないSFJの問題を克服し、より運用能力を高める目的で、2015年度からは『げんき』Iを主要教材として採用した。同じクラス内の非常に異なったニーズの学生に対応するために、日本人や日本語が上級レベルの留学生をボランティアとして招き、自分のしたい学習をする時間(チュートリアル時間)を設けた。学生たちは、宿題をする、文法を練習する、会話をするなどの課題をそれぞれ見つけ、グループを作って、ボランティアといっしょに各自の活動を行った。授業担当教

員は、グループ活動がうまく回っているかチェックし、一人で宿題等を行っている学生の様子を伺うなど、それぞれの活動をサポートした。15年度前期には、3人、後期には5人のボランティア学生がサポートしてくれた。

表3. 初級前半レベル受講者推移

科目名	09後 <sup>*1</sup>	10前 <sup>*3</sup>	10後 <sup>*4</sup>	11前	11後	科目名	12前	12後	13前	13後	14前	14後 <sup>*5</sup>	15前
Aコース (総合)	16	3	10	1	7	総 合	8	16	10	14	8	35	15
Bコース (総合)	14	—	15	—	7	—	—	—	—	—	—	—	—
漢 字	4 <sup>*2</sup>	6	6	3	11	漢字語彙	3	13	1	10	7	29	12
文 法	—	3	7	4	15	文 法	6	11	4	10	5	29	8
会 話	11	3	14	4	12	会 話	8	14	7	11	6	28	13
読 解	—	3	6	4	8	読 解	3	8	1	9	5	24	5
読み書き	—	—	—	3	5	作 文	3	5	—	—	—	—	—

\*1 その他「発音・リスニング」科目（7名）、「生活日本語」科目（8名）開講

\*2 漢字圏向けクラスのみ的人数。非漢字圏向けクラスは不明

\*3 その他「発音・リスニング」科目（1名）開講

\*4 その他「発音・リスニング」科目（5名）開講

\*5 2クラス開講し、2クラス分を合わせた数。研究生の入学者数が急に増えたため。

### 3-2 IIレベル（初級後半）

2009年度後期から2011年度後期までは、SPACEと研究生等を分けて授業を行うために総合コースを2クラス設けた。しかし、受講者数が十分に確保されないことなどから、2012年度より1クラスのみ開講されるようになった。同様に漢字についても、2009年度後期のみ漢字圏対象と非漢字圏対象の2クラスを設けていたが、2010年度前期からは1クラスに統合された。

受講者推移を見てわかるように、総合コース、技能別クラスともに受講者数にばらつきがある。入学するSPACEの日本語レベルが年度によって異なり、そのために安定した受講者数とならないことが原因である。総合コースは2012年度より1科目に統合したため、2013年度前期以降はクラス開講に十分な受講者数を確保できるようになった。

総合科目はSFJのvol2と3を主教材として使用した。日本語研修コースの学生も在籍するため、主教材以外にも毎日多くの宿題が課せられ、受講者は集中的に日本語学習を進めた。初級Iレベルと同様だが、大学院生や研究生は、学期途中から忙しくなり学習意欲が減少するという問題があった。それを解決するために、2015年度後期からは、総合科目の教科書をSFJから『げんき』（The Japan Times）に変更した。初級後半レベルでは、『げんき』IIの第13課から第23課を週に6時間の授業で1学期間を通して扱った。SFJほど予習・復習を要求されないという点では、日本語学習にあまり時間がさけない学生にも適していると思



われるが、英語のできない学生には逆に英語と日本語を学ぶということとなり負担があるようである。

初級後半レベルの学習が終わった段階では、目安として日本語能力試験N4合格程度を基準としていたが、総合科目の受講者の半分ほどはN3レベルに達していた<sup>6</sup>。

問題点としては、先にも述べたように、総合科目を受講していた大学院生や研究生が、学期途中で研究が忙しくなり、日本語授業に対する学修意欲が下がることが挙げられる。そのような受講者に対しては当初から技能別クラスを履修するように勧めた。

また、各担当教員に任されていた技能別クラスの授業内容と、総合コースの授業内容の横のつながり、さらに技能別クラスの上下レベルとの縦のつながりを持たせることが難しく、課題であった。

### 3-3 レベルⅢ（初中級）

初中級レベルは、初級から中級への橋渡しとなるレベルで、2009年度後期からのカリキュラムで新しく設定された。初中級の学習を総合的に行うための総合コースと、技能別クラス（読解、作文、会話、漢字・語彙の4クラス）とが設けられた。

以下、総合コースにしぼって、その内容について述べていく。

表4. 初級後半レベル受講者推移

科目名	09後 <sup>*1</sup>	10前 <sup>*3</sup>	10後	11前	11後	科目名	12前	12後	13前	13後	14前	14後	15前
Aコース (総合)	7	—	—	1	—	総合	4	3	13	11	10	11	21
Bコース (総合)	2	16	9	10	5	—	—	—	—	—	—	—	—
漢字	7 <sup>*2</sup>	7	5	4	8	漢字語彙	4	1	8	4	5	7	8
文法	—	6	8	7	5	文法	13	6	8	12	11	5	7
会話	7	5	9	7	7	会話	9	5	5	17	11	9	12
読解	—	2	9	7	3	読解	4	6	6	9	6	5	8
読み書き	—	—	—	7	4	作文	7	4	5	8	4	5	5

\*1 その他「発音・リスニング」科目（6名）、「生活日本語」科目（4名）開講

\*2 漢字圏向けクラス、非漢字圏向けクラスの2クラスを合わせた数

\*3 その他「発音・リスニング」科目（2名）開講

総合コースの6コマのうち4コマは、「話す、聞く、書く、読む活動に必要な文法や表現を学ぶ」クラス、1コマは、聞く活動に特化したクラス、1コマは、漢字・語彙のクラスであった。2013年度から5コマになるのにもない、漢字・語彙のクラスを外して、学生には技能別に用意されている漢字・語彙のクラスをとってもらうことにした。

<sup>6</sup> 実力テストとして行った日本語能力試験の過去問の結果による。

「話す、聞く、書く、読む活動に必要な文法や表現を学ぶ」クラスの目標は、次の1)から3)である。

- 1) 初級で勉強した文法が使えるようになる。
- 2) 初中級で必要な文法を学ぶ。
- 3) 良い人間関係を維持できる話し方・書き方ができるようになる。

一方、「聞く」クラスの目標は、次の4)である。

- 4) 話の大体の内容と必要な情報を聞きとれるようになる。また、話しことばに見られる縮約や音変化の形を聞いて、元の形がわかるようになる。

次に、カリキュラムについて述べる。

「話す、聞く、書く、読む活動に必要な文法や表現を学ぶ」クラスでは、目標の1)と2)を達成するために、教科書として『みんなの日本語 中級Ⅰ』(スリーエーネットワーク)を使用している。『みんなの日本語 中級Ⅰ』は、各課が「文法・練習」、「話す・聞く」、「読む・書く」から構成されており、「話す・聞く」および「読む・書く」に出てくる文法項目が、「文法・練習」で提示されている。そこで、「文法・練習」に2コマ、「話す・聞く」に1コマ、「読む・書く」に1コマあてた。

次に、目標の3)を達成するために、教科書をはなれて、特別メニューを2回設けた。1回目は、「メールを書く」という授業で、2回目は「意見を言う」という授業である。いずれの授業でも、相手に配慮した話し方や書き方を学んで練習する内容である。「意見を言う」練習をしたあとで、実際に、日本人学生に授業に参加してもらい、ディスカッションを実施している。

一方、「聞く」クラスでは、教科書として『新・毎日の聞き取り50日(上)(下)』(凡人社)を使用し、その中から29の課を選んで、1回の授業で2つのレッスンをとりあげている。クラスの目標のうち「話しことばに見られる縮約や音変化の形を聞いて、元の形がわかるようになる」ことを達成するために、授業のはじめに、話しことばに見られるさまざまな縮約や音変化について1つずつ取り上げ、元の形がわかるようになるための練習を自作作成して、実施している。

最後に、この6年半の間に改善を重ねてきた点について述べる。

文法項目については、初級で学んだものの使えるようになっていない項目については、かなり上手に使用できるようになる。一方で、新しく学ぶ中級の文法項目の中には習得が困難なものもある。それらについて、時間配分を工夫したり、さまざまな形の練習を工夫してきた。また、読む練習においては、ピア・リーディングを取り入れるなどして、学生がより主体的に学ぶ機会を増やした。

教科書については、コース終了時に実施している授業評価で、『みんなの日本語 中級Ⅰ』はレベルにあっているという声が多いためであることから、レベルⅢの学生に適した教科書であるといえる。しかし、この教科書で用意されている読解文章は短めであり、初中級

レベルを終了して中級に進んだ際に、中級で読むことが要求される長めの文章についていけない学生がいるという問題もあったため、1つの解決策として、中級の教科書の文章にもチャレンジしてもらうことにした。そして、文章を読んだあとに、それをもとにディスカッションをし、長めの意見文を書いてもらっている。

今後の課題として、「話す、聞く、書く、読む活動に必要な文法や表現を学ぶ」クラスの目標の3)がある。日本語が上達するにつれてより大切になってくる、相手に配慮した言語使用は、レベルⅢの学生にとって、知識としては理解できても、使用できるレベルにまでは到達できない。これができるようになるためのさらなる工夫が必要であると考える。

表5. 初中級レベル受講者推移

科目名	09後*1	10前	10後	11前	11後	科目名	12前	12後	13*3前	13後	14前	14後	15前
Aコース (総合)	11	11	5	10	13	総合	10	5	13	10	9	6	13
Bコース (総合)	6	7	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
漢字	15*2	20	8	8	4	漢字語彙	6	3	9	12	9	8	9
会話	12	7	5	3	10	会話	12	5	10	12	7	10	9
読解	—	9	5	3	4	読解	11	2	8	10	11	5	9
作文	—	—	—	4	5	作文	5	2	2	10	11	6	12

\*1 その他「生活日本語」科目(4名)開講

\*2 漢字圏向けクラス、非漢字圏向けクラスの2クラスを合わせた数

\*3 2013年度より、総合科目は5コマ

### 3-4 レベルⅣ(中級)

レベルⅣは、レポートを書く、学術的な発表を行うなどのアカデミックな活動を行う前の段階のレベルと設定された。レベルⅣには総合クラスがなく、読解、会話、聴解、作文、漢字・語彙の技能別クラスが開講された。

目標としては、以下のようなものが挙げられた。

- ・身近なことから社会問題まで幅広い話題について、クラスメートと意見交換をし、自分の意見が書けるようになる。(日本語作文Ⅳシラバスより)
- ・大学の講義聴解に向けて、ある程度の長さの説明的な談話を聞き取り、必要な情報を得ることができる。(日本語聴解Ⅳシラバスより)
- ・日常生活における様々な場面や状況に際し、適切な表現で自分の意思を伝えることができる。(中級会話Ⅳシラバスより)

また、クラス内ディスカッションやピアワークなどを使ったアクティブ・ラーニングが取り入れられた。必要に応じて、N2程度の文法項目を取り上げることもあった。

表6. 中級レベル受講者推移

科目名	09後*1	10前	10後	11前	11後	12前	12後	13前	13後	14前	14後	15前
読 解	15*2	15	13	12	8	15	9	12	10	17	5	8
会 話	不明	15	17	10	11	14	7	12	11	17	6	7
聴 解	14	10	14	9	9	13	4	9	11	17	7	6
作 文	-	16	17	9	8	17	9	9	7	18	4	9
漢字・語彙	-	-	12	12	3	11	4	11	14	17	11	8

\*1 その他「文法と四技能」科目（15名）、「発表」（受講者数不明）開講

\*2 科目名「読解・作文」

### 3-5 レベルV（中上級）、レベルVI（上級）

Vレベル、VIレベルは、より大学での授業を意識した授業科目で構成された。中上級レベルは、読解、発表、聴解、作文の授業が開講され、上級レベルは、主に会話、発表、読解、作文の授業が開講された。2014年度以降は、会話、発表、聴解の各科目をそれぞれ中上級、上級レベルで共通科目として統一することで、授業内容の重複が解消でき、さらに受講者数が極端に少なくなることも避けられるようになった。

また、2013年後期に、日本語能力試験N2以上に合格している学生が主体の交換留学プログラム（SPACE-Jプログラム）を開設したことに伴い、中上級、上級レベルの学生は増えている。

中上級、上級では、日本語そのものを教えるというよりは、日本語を使って課題を行うという側面が強い。新入学生は言語知識が十分にあっても運用能力が知識ほどのレベルに達していない場合が多く、1年間の交換留学生であれば、最初の学期は中上級でしっかり基礎固めと運用能力の育成をし、2学期目で上級レベルに進むということが多かった。

なお、SPACE-Jの場合、最初の学期で中上級にレベル判定された学生が、次学期には日本語授業を受講せず、専門科目のみを受講する場合も増えたため、中上級レベルに比べて上級レベルは受講者数が少ないことが多かった。

中上級レベルと上級レベルでは、会話や読解など、時事的な話題を取り上げて行う授業が多いため、授業内容のすみ分けや関連の持たせ方などが課題であった。

表7. 中上級・上級レベル受講者推移

	科目名	09後*1	10前*2	10後*3	11前	11後*4	12前	12後	13前	13後	14前	14後	15前
中上級	読解	7	8	3	10	6	8	9	12	20	7	11	9
	発表	6	7	6	7	6	10	6	13	17	-	10	-
	聴解	不明	11	4	8	5	11	11	8	13	16	16	10
	作文	18	8	4	13	4	18	10	9	14	13	17	11
上級	会話	10	-	6	12	4	8	21*5	8	12	16	15	-
	発表	1	24	5	8	6	6	9	7	4	16	-	9
	読解	-	-	-	10	2	4	12	11	5	10	9	7
	作文	13	6	6	8	-	6	-	11	3	8	5	6

\*1 その他、上級「フィールドワーク」科目（受講者数不明）開講

\*2 その他、上級「日本語クリニック」科目(12名)、「外国人のための日本語教授法」科目(10名)開講

\*3 その他、上級「外国人のための日本語教授法」科目（9名）開講

\*4 その他、上級「人間理解とコミュニケーション」科目（4名）開講

\*5 2種類の会話科目を合わせた数

## 4. 見えてきた課題と今後

### 4-1 学生のニーズに合わせる

2009年版カリキュラムを手直しする形で、それ以後の佐賀大学の日本語カリキュラムは運営されてきた。2009年度以降、日本の大学は、大きな国際化の波が押し寄せ、理科系の大学院レベルの学生には、研究で高度な日本語能力が求められることはなくなった。一方で、日本語で研究することを求められる研究生／大学院生も存在し、そのニーズは多様化していると言える。さらに、母国で日本語を学んできた交換留学生たちが求めるものも、非常に多様化している。日本語のコースを提供することだけが、彼らのニーズに応えることではない側面も生じている。

このような状況のなかで、佐賀大学のように、学生の属性にあわせて多様な日本語教育を提供することができない地方国立大学で日本語教育は何を目指すべきなのか、関係各者による十分な議論が必要であると考えられる。

大学の日本語教育で求められることが多様化している状況に対応する方策の一つとして、日本語教育を、教師が主導する教室活動に特化するのではなく、より学生の側に主体性を持たせたアクティブ・ラーニングや自律的学習を取り入れたカリキュラム設計が求められるのではないかと。2009年版カリキュラムでも、調査活動や発表、ピアワークを取り入れるなどアクティブ・ラーニングの要素が取り入れられたり、日本語総合Ⅰや教養教育の日本語でチュートリアル等の活動を行ったりなどの試みがすでに行われているが、より組織的に、活動を取り入れる必要があるだろう。そのためには、理念を含め、本学の日本語教育は何を目指すべきなのか、柱を作ることが必要だと考えられる。

#### 4-2 カリキュラムとしての統一性をもたせる

2009年版カリキュラムでは、横のレベル設定は、授業開始時にプレースメントテストあるいは履修履歴から決められていた。授業開始後のコーディネーションは、各レベル担当の専任教員に任せられていたが、ある程度のレベルの共通の認識が生まれていたと考えられる。

しかし、その共通認識を言語化したり、身分やニーズが異なる学生を一つのクラスで教えることの難しさを担当クラスを超えて共有することは難しかった。その原因には、非常勤講師室の配置や専任教員の多忙さなど様々な理由が推測されるが、一つのカリキュラムを運営するものとして、非常勤講師、専任教員を問わず、日本語コースに関わる教員が、レベル横断的、技能縦断的な共通認識を持てるように、コミュニケーションを活発にする必要があるのではないか。2014年度には、日本語教育部会主催のFDを開催し、専任教員、非常勤講師がともに学ぶ機会をもったが、その努力は実を結んだとは言い難い。今後、すべての教員が努力していかなければならない点だろう。

#### 〈参考文献〉

- 留学生教育研究部門年報（2009）『佐賀大学留学生センター紀要』（9） pp. 125-167
- 留学生教育研究部門年報（2010）『佐賀大学留学生センター紀要』（10） pp. 109-142
- 留学生教育研究部門年報（2011）『佐賀大学留学生センター紀要』（11） pp. 67-98